

往還二廻向と浄土

菊 村 紀 彦

往相・還相の二廻向を浄土教の真実相として取りあげたのは、本邦では親鸞以外に見当たらない。

親鸞は、中国僧曇鸞の「浄土論註」下巻を引用して「謹按浄土真宗、有二種廻向、一者往相、二者還相」を「教行信証」の教巻昌頭に掲げている。

しかし、古来この二廻向の解釈については晦渋で、現代仏教学に対応し難いものがある。往相については菩薩行と考えられぬこともないが、浄土往生した後、ふたたび穢土に帰還し、衆生済度を為すという思考は、難解であろう。浄土教の旗印しはあくまで「欣求浄土」であり、「厭離穢土」であるからだ。

一般的に考えれば、称名念仏によって浄土へ往生し、仏となった身を現世に立ち戻って他者を救済するということになろう。もしもそうならば、物理的に見て不可解である。体失往生故である。たしかに「歎異抄」四章にその連動と見られる節がないでもない。「浄土の慈悲というは、念仏していそ

ぎ、仏になりて、大慈大悲をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにかいとおし不便とおもうとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてせうろうべき」とある。「いそぎ仏になる」とは、そもそも如何なることであろうか。浄土教を直截的にいえば、凡夫の直入という易行門に他ならない。凡夫……在家人とは仏になるべき機根を持たぬ性格のものだ。この点いわゆる中期大乘において説かれる「如来藏思想」とは一線を画するものであろう。修行をして仏に成ろうという聖道門とは相違するものである。仏になれない衆生の救済を目的とする宗教が浄土教といえよう。この世で成仏（非体失）できないから阿弥陀仏の本願他力によって彼岸において浄土に往生させていただくというのであるから、「いそぎ仏になる」ことは彼岸においては不可能なのである。

親鸞についていえば、還相廻向の具体的記述は殆ど為され

ていないが「教行信証」証卷に「浄土論註」の原文を引用している。「還相者生彼土已得奢摩他毘婆舍那方便力成就、回入生死稠林、教化一切衆生、共向仏道。若往若還皆為拔衆生渡生死海。是故言回向為首得成就大悲心故」

この大悲心が、廻向の源泉であるから、還相のみならず、往相もまた仏の本願力であろう。「行巻」「正信念仏偈」の「往還廻向は他力に由る」の七字が光る。往還二廻向が、衆生力によって顕現されるのではなく、すべて阿弥陀仏の智願廻向によるものであることが分明されよう。こう考えれば、往還の本質が見えてくる。なお、親鸞は、宗教として「真宗」（教団名ではない）について「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲廻向の利益なり」と記述している。（証巻）またこの項で「無量寿経」上巻の四十八願中の二十三願から「利他教化地の益」が出たことが記述されている。ただし、二十二願は、「必至補処の願」とも呼び、ここでは阿弥陀仏ではなく普賢の徳となっている点がやや異なる。もっとも、普賢行と法蔵菩薩の五劫思惟の精神構造とは相違しないことはいうまでもなからう。普賢行は「理・定・行」であるから、基本姿勢においては菩薩行であり、衆生への教化・救済であることには違いない。

このことは、江戸時代の真宗教学者香月院深^{あか}勸が既に指摘している。

廻向と云うは願生の行者の利他廻向で衆生済度のこと、その衆生済度に二種の相がありて、今因の五念門の中の第五の廻向門は娑婆にありて自信教人信常行大悲で衆生を済度するは往相の廻向、又果の五門の中の第五の園林遊戯地門は、浄土に生じ終わりて後の衆生済度じゃによりて還相廻向なり

廻向は、行者の利他廻向、衆生済度とある。現世において念仏者が、自身だけでなく他人にもすすめるという行為が往相廻向であることは納得できる。しかしながら還相廻向となると「浄土に生じ終わりて後の衆生済度」としている。還相の解釈については、江戸時代には「依法不依人」で、近代仏教学の眼を求めることはできない。だいたい、曇鸞の「五念門」や「五功德門」に対する釈は、実に独創的といえよう。

この師にはロゴス (Logos) とパトス (Pathos) の二面があり、それでいて少しも背反せぬところに魅力があるのだ。「因の五念門」のうち廻向を往相に「果の功德門」の「園林遊戯地門」を還相に考察したのは、如何にも浄土教的であろう。しかし、そのいっぽうで空性論を展開し、「彼の浄土は是阿弥陀如来の清浄本願無生の生」なりといい、「真実知恵とは実相の知恵なり。実相は無相なるが故に真智は無知なり。無為法身とは法性身なり。法性寂滅なるが故に法身無相なり。無相の故に能く相ならざる無し」という思考は、親鸞の提唱する「真仏土」に近いものではあるまいか。

さて深励は「入即往、出即還」という単純な形式的な思考を排している。「因の第五門を還相との給う事はなし、然れば果の第五門の出は還相なれども、因の第五門の出は還相ではないによって出を還相と云う事はなき也……往還の二相はただ衆生の往生にある事なり。往相は衆生が浄土へ往生する事、還相は衆生が浄土へ生じて再び穢国へかえる事というは『信巻』の御引文の御点あきらかな事なり。廻向の言を我が祖（親鸞）は弥陀の廻向とし給えども、往還の二相を弥陀に約するという事とは決してなき事なりと知るべし」

深励は、往還二廻向とあつても、廻向は阿弥陀仏にあり、往還は衆生の側にあることを述べている。つまり、仏の「自利円満を往相と名づけ、阿弥陀如来報応化種々の身を示現すと云う」考えかたは「浄土論」にも「浄土論註」にも、親鸞の私釈にも「ない」といい切っている。廻向は「他力に由る」ものだが、往相・還相は、あくまで衆生の精進によるものには違ひなからう。よらねばならない。

ただ往還二廻向のうち還相については現実的にも具体性にも欠けることを指摘せねばならない。浄土教という「普通の法、特殊の機」であるなら往相は念仏往生という普通の法であるが、還相は特殊の機といえないだろうか。念仏往生は、輪廻・転生といった一種の苦悩を絶ち、俱会一処の世界に生

ずるのである。「一切の業繫ものぞこりぬ」という完成世界に違ひない。浄土は、俗な表現をすれば「これでおしまい」の世界といえよう。しかし、その境にとどまらず、ふたたび娑婆に還来して衆生済度に向かうのが還相である。これは自利利他という大乘思想であるが、その底に阿弥陀仏の大悲心が作用している。「法蔵魂」というものかも知れない。

ここで思い出させるのは、印度古代思想の「二道五火説」である。比較させて見たい。ただし、サンスクリット語で往還を「ガタ・プラティヤヤーガティカター(gata-pratyāgātikā)」と呼ぶが、さほど深意を含むことではない。単なる往復の義であろう。ここには廻向(parihāṇāna)の思想が入っていないことはいうまでもないが、印度古代思想のうち「チャーン・ドーギヤ・ウパニシャッド」を典故としてヤージュニヤヴァルキヤ説の「二道五火説」が興味深い。二道とは「神道」と「祖道」である。

「神道(Deva-yāna)」とは「真理を正しく信知する人は、死後、火葬の煙りによって上昇し、太陽・月を経て梵の世界に到達する道」であり、「祖道(Ītir-yāna)」とは「死後において、まず月の世界に到達した後、虚空・風・煙・霧・雲・雨となって地上に下り、食物となって人間の胎内に入る」道すじをいう。「無量寿経」の二十二願・必至補処の願にやや近似しているのが神道であるが、しかし、輪廻してゆく「祖

道」は、一種の迷いの世界であるから還相の廻向とはいえない。わたしは、印度古代思想に往還二廻向を求めているわけでは決してないが、このような分類はいかにも東洋的精神主義に基づくものであり、パトスの所産に違いないにしても、ギリシャ哲学などとは根本的に相違していることは興味深い。

仏教經典……浄土教經典に往還二廻向を直接法として説いているものない。さきにもふれたように「無量寿経」上巻の二十二願に説く必至補処の願であろう。仏国土に生じたものは「恒沙無量の衆生を開化して無上正真道を立せしめ、常倫に超出し、諸地の行、現前し、普賢の徳を修習」する人という表現がある。しかし、これは「他方仏土の諸菩薩衆」が阿弥陀仏の浄土に來生したものであるから、該經典に見る限り、既に菩薩となった衆のことである。厳密に考えれば、果して他方仏国土への往生は、念仏往生なのか、あるいは聖道門の修行を積んだ菩薩なのか分明しないのである。聖道門に依る菩薩であれば、念仏往生の易行門たる往相とはいえないではあるまいか。単に浄土に向う相というならばたとえ、他方仏土からでも阿弥陀仏の浄土に來生するのであろうから往相であろうが、聖道門の修行と念仏による往生とは往生の基本が異なるからだ。

この点、サンスクリットによる原典（足利本）は、さすがに

正確である。「もしも、わたしが世尊（世自在王仏）、覺りを得た時に、かの仏国土に生ずるであろう衆生が、すべて無上正等覺において一生補処でないならば正覺を取らない」とある。ここでは、他方の仏土から來生した菩薩衆ではなく、ダイレクトに往生した人、つまり往相なのである。智願廻向による往生だから、全く問題はない。

他の浄土經典に至っては、「無量寿経」ほどではない。「仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経（支謙訳）」では、法蔵菩薩が経を説き道を行するのであって還相の菩薩ではない。「無量清淨平等覺経（支婁迦讖訳）」では「不一生等」であれば「我不作仏」とあるから還相ではない。「大乘無量寿莊嚴経（法賢訳）」では十五・十六願にやや還相の菩薩に近い形が見受けられる。つまり、一生補処を願わない菩薩が「普賢行」を修するといふのである。しかし、曇鸞のいう還相廻向といふカテゴリーに入るかどうか、疑問に考えられる。

曇鸞が二廻向の原典としたのは、世親の「浄土論」の五念門にあることは先にもふれたが「礼拝・讚嘆・作願・觀察・廻向」のうちの廻向にこの師が天才的なひらめきを感じたのであろう。因としての五念門のなかの廻向はまさしく往相に他ならない。廻向は、この場合、法蔵菩薩の大慈悲心に基づくものであることは、廻向なる本願他力の性格をよくあらわしている。親鸞は、一層明晰に記述した。以下（「入出二門偈

頌)

いかに廻向したまう、心に作願したまいき。苦惱の一切衆生を捨てたまわざれば廻向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に功德をほどこしたまえり

曇鸞は、廻向そのものが阿弥陀仏の本願力であり、五念門を行ずる人そのもの力ではないとしている。しかし、親鸞は「菩薩は五種の門に入出して自利利他の行成就したまえり」と説き、この菩薩行が法蔵の道そのものであると釈したのである。

また、出の原典は果の第五門、蘭林遊戯地門と思考した曇鸞は、阿弥陀仏の智願廻向ではあっても、法蔵の修行そのものではなく、あくまで行ずる人のために分析したものである。親鸞とはやや焦点が異なるのである。しかし、よくよく考えてみれば、法蔵菩薩は阿弥陀仏であるから、五念門を修する時点には、菩薩行で、大悲心の成就は、浄土という仏国土建設に依って完成する。浄土という場があってこそ阿弥陀仏たらしめるのであろう。菩薩行は、浄土教の場合、自利利他といっても、観音・地藏などとは違い、強いていうならば直接法ではなく、間接法ではなからうか。この手で衆生を救済するのではなく、阿弥陀仏に願うものである。念仏は、自力で寂滅・禅定して涅槃の境地を得るのではなく、救われていくことのよるこびをあらわすものである。しかし、念仏者

は、確かに大行であり、大信であり、極難信といわれるが、信心徹しても自身が菩薩となる道ではない。もしも、菩薩と呼ぶことができるとしたら、それは浄土に往生した時点であろう。現世においては菩薩となり得ない衆生が救済される易行門なのだ。いってみれば、念仏者は不退の位に住すのだから、それは正定聚である。といっても幾人の念仏者が正定聚の位に住することができようか。まさに蓮如のいう「国に一人か、郡にひとりか」ということであらうか。

この問題は、しかし、文章の表現において……ことに日本ではイジーに使われる。前記蓮如のことばにもあらわれている。また「歎異抄」にも「いそぎ仏となりて」というような記述が見られる。その影響は現代にもつづき、遺体のことをこの国では仏と呼ぶ傾向が見える。バトスとしては理解できるが、少くとも浄土思想とはいえないからう。

浄土もまた、そのように使われている。死者はすべて浄土に到達しているものと考えているようだ。極楽の蓮台において待っているからという表現に見られる通り、浄土往生は既定の事実かのように安易に使われる。単なることばの綾ということが判っていても、成仏とは馴染むものではないと思う。小見だが「往生とは浄土教、成仏は聖道教の表現」ではなからうか。もっとも法然は「往生は易く、成仏は難し」と説き、現代の親鸞学者では曾我量深・金子大栄両教授は、そ

れぞれ次のように釈している。

曾我氏は「往生を真実に生きること」とし、「成仏は娑婆世界でもって修行して成仏するということは、あるはずがない」と二局化して分別し、往生を現世に、成仏は来世にという考えを示している。いっぽう、金子氏は「往生は凡夫が念仏によって感得する境地、成仏は聖者のゆきつく道と釈し」必ずしも成仏を以て体失とは思考していない。しかしながら往生を非体失で、「往きて生きる」ことにあることは両氏とも同じである。さきの法然とも一致する。（但し法然の場合は、往きて生れる・浄土に生じるといふ解釈をしたほうがふさわしいものと感じられる）

このように往生といい、成仏といってもその解釈は一定していないのである。まことに漢字なるものは微妙であり、他種他様な意味合いを持つものだと思う。

さて、往還二廻向の浄土とは如何なる場所であろうか。浄土經典には、浄土から娑婆への帰還については甚だ消極的といわねばならない。本来浄土は、窮極の地点であるからだ。しかしながら浄土教が大乗仏教の旗印しを持つ限り、自利利他の要素がなければならぬ。さもなければ、古代印度思想における「神路」に近いものにならう。浄土に來生した衆生は「一切の業繫ものぞこり」、「業垢をのぞき解脱」するのである。印度思想的にいえば、輪廻の苦惱から脱却した世界な

のだ。寂靜であり、「無為涅槃界」なのである。ましてや曇鸞のいう「無生の生」ということになればやはり空性の感覺もあるう。わたしは曾て浄土を三種に分類した。

- 一、經典に説かれていた浄土。
- 二、念仏に依り感得される浄土。
- 三、空性の浄土。

日本仏教では一、二が主流である。浄土系列の寺院がこの国最大最多であることから見て三の空性論を展開することは極めて難しからう。しかし、現代の仏教学が原典対照の時代であり、漢訳經典の翻訳ミスが指摘される風潮が（学問的に見て）ある以上、無視するわけにはゆかないのである。逆にいえば寺院仏教が、現代人の心を動かすだけの力があるのだからかという悲愴な形相を呈してはいないであろうか。

むしろ、空なる思想に魅かれて仏門に帰すが増加しているようである。無論、空なる思想を単なる虚無に受け取る向きもあり、危険な面があることも事実だが、真実の念仏の意義を解せず、単なる口称のみの念仏もまた同じであろう。曇鸞の説く空・無相の浄土とは、根本思想としての浄土教に背反しないものか。親鸞は、浄土を空相で釈してはいない。しかし、真仏土巻で前記「浄土論註」や「涅槃經」を引用している。殊に「涅槃經」の「真解脱者不生不滅、是故解脱即是如来」は、拙論の二、三に当たるものであろう。「迦葉品」

はおびただしい等号による肯定は驚異的である。(漢訳経典)

「無量の名」とは「涅槃のごとし、また涅槃と名づく、無生と名づく、無出と名づく」以下、無為・帰依・窟宅・解脱・光明・灯明・彼岸・無畏・無退・安处・寂静・無相・無二・一行・清凉・無闇・無礙・無諍・無濁・廣大・甘露・吉祥・無量名」とつづく。ここでは煩惱と解脱が同一線上に並んでいる。「煩惱即菩提」というのが了解の要はなからう。「煩惱」も「解脱」も涅槃の要因であるから一見異なつた文字も止揚(authen)しているところに仏教経典の奥ゆきがあらう。親鸞は、真仏土巻において、単に阿弥陀仏の性格や仏国土を讃仰するのではなく、無為涅槃界としての場、念仏によつて感得される知恵の開顯された世界、安らぎの世界を思考したのではあるまいか。それかあらぬか親鸞は「大般若経」の涅槃悲化品から釈尊と須菩提の問答部分を引用している。ここでは空性がただよう。注目されねばなるまい。

(善導「観経流」玄義分より)

一切法はみなこれ化なり……有仏無仏、諸法の性常に空なり。性空なる、すなわちこれ涅槃なり……かくのごとし、諸法は平等にして声聞の所作にあらず、内至性空なれば即ちこれ涅槃なり

「教行信証」真仏土巻には、このような思想が散りばめられているのである。一般に徹底した西方への信仰者としての善導、法然をして「遍依善導」といわしめた善導の学問的面を

冷徹に観てゆかねばなるまい。「空性論」を唐時代の流行とのみ考えて釈することは、誤診ではないであらうか。しかし、親鸞は、これ以上の引用もなく、私釈もこの部分に関しては見られない。この後「観経疏」序分義・定善義・「法事讚」の他、懐興の「述文賛」を引用し、結句、私釈は「安養淨利は眞の報土なることをあらわす」ものであり、「安樂仏国にいたれば、即ち必ず仏性をあらわす。本願力の廻向に依るが故に」となっている。浄土に往生した人が、本願他力の廻向に依つて仏性をあらわすのである。してみれば、還相廻向の起点は仏性をあらわす他にはないのであらう。しかし、仏性をあらわしても、ふたたび娑婆に還つて教化するとは限らない。浄土に止住し、阿弥陀仏の眞説を聴聞するだけの衆もあらう。還相の菩薩とは一体どういふ存在であらうか。空性の浄土からの還来はあり得ないからだ。

親鸞は、具体的に還相廻向を記述していないが、しかし、パトスとしての和讃には明確に詠っている。

「還相の廻向とくことは利他教化の果をえしめ すなわち諸有に廻入して普賢の徳を修するなり」(高僧和讃 曇鸞編)

浄土から有情の世界への還来を計っていることは明らかである。廻向なるものが仏の大慈悲心に基づくものであるなら還相即大悲心であることが判る。和讃でいえば、往相を詠つたものが更にそのことを理解することができよう。

「往相の廻向とくことは弥陀の方便ときいたり 悲願の信行えしむれば 生死すなわち涅槃なり」

廻向とは、ここでは方便なのである。それは阿弥陀仏の大慈悲心に基因することはいうまでもない。また、生死即涅槃という浄土教らしい思想が打ち出されている。これは十八願の至心信樂欲生の信を全うし、念仏を称える人の路が明示されているのである。往相も還相も要するに同じ次元なのだ。しかしながら現実生活のなかに呻吟している人間という名の衆生は、往相廻向のみを感じ、還相については、感觸さえも遠い世界である。ただ思うことは感觸が大切だということではあるまいか。わたしは曾て「還相廻向を論ずることの困難さは……文献を収集することはできても、純粹に定義したうえで、その実践が不可能であるからだ。しよせん、『歎異抄』の『念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心』という響きを聞くのみである……『仏のかたより廻向したもう』ところから発する念仏を聞思するところに還相の風韻が聞こえてくる他は、まさに言亡慮絶、慚愧の心がみなぎるばかりである」と記した。

それは、現在も変わることがない。まことに、還相廻向は極難信である。わたしは浄土教思想を評して次のように表現したい。

「地獄は実存を超えた実存、浄土はパトスを超えたパト

ス」と。

いま還相廻向を強いていうなら、それは「ロゴスを超えたロゴス」であろう。

- 1 源信「往生要集」。
- 2 深励「註論講苑」。
- 3 曇鸞「浄土論註」下巻。
- 4 金子大栄著「普通の法・特殊の機」大谷大学真宗学研究室。
- 5 親鸞「讚阿弥陀仏偈和讃」。
- 6 S. Radhakrishnam The Principal Upanisad, edited with introduction, text, translation and notes by him.
- 7 足利本十二頁参照。但し原典では二十一願目に当たる。
- 8 曾我量深・金子大栄著「往生と成仏」岡崎教務所。
- 9 善導「法事讃」。
- 10 「印度学仏教学研究」第二十八巻一号百二十八頁所載。
- 11 菊村紀彦著「親鸞 教行信証の世界」二百八十九頁。

△キーワード▽ 親鸞思想、教行信証

(日本仏教思想研究所長)